

### 玉里の郷土芸能

- ① 川子野大神楽
- ② 玉ノ木神楽
- ③ 峯ノ後大神楽
- ④ 行山流 角懸鹿躍
- ⑤ 奥山流 羽衣念佛剣舞
- ⑥ 元町座敷田植踊
- ⑦ 小川原流 和田神楽
- ⑧ 青篠神楽
- ⑨ 熊野田念佛剣舞
- ⑩ 奥山行山流 内ノ目鹿踊
- ⑪ 内ノ目神楽
- ⑫ 大償斉部流 次丸神楽
- ⑬ 江刺甚句踊り



玉里第5区自治会館落成記念式典で

内ノ目鹿踊は、文政二年（一八一九）、古屋敷の萬太郎が栗原郡築館村の武藤某より奥山流鹿踊を伝授され、内ノ目集落で踊られたのが始まりとされている。江戸末期以降には活動が一時途絶えるが、明治一四年（一八八一）、後藤養之助が東山の佐々木新左門、菊池源右門の両名から奥山行山流を伝授され、養之助が初代庭元となって以後、奥山行山流鹿踊として今日まで踊り継がれている。昭和三八年（一九六三）NHK主催の東北六県「みちのくさなぶり芸能祭」に出演し特別賞を受賞するなど、東京・名古屋・大阪・札幌の国内祭典出演、海外交流のハワイ公演等を行った。また、平成四年度に第四十一回全国青年大会郷土芸能最優秀賞を受賞した。

### 奥山行山流 内ノ目鹿踊



5年に1度の玉崎駒形神社例大祭で

種貫郡東和町晴山神楽の流れをくむ大償斉部流鴨沢神楽より伝承された。伝承者は岩手県陸中国江刺郡廣瀬村鴨沢に明治元年（一八六八）に生まれた菅野廣治が次丸に養子として縁組、たまたま明治二五年（一八七二）旧三月一七日、玉崎駒形神社春のお祭りに踊の指導されたのが神楽であり、これが始まりである。また、これが次丸神楽である。

### 大償斉部流 次丸神楽



平成21年6月玉里の農業者トレーニングセンターで

江刺地方で親しまれる江刺甚句は玉里地区で古くからうたわれていた囃子唄が発祥といわれ、昭和五六年（一九八一）に玉里地区が「えさし甚句のふる里」として認定され、江刺甚句踊り保存会を結成。平成五年（一九九三）からは旧江刺市郷土芸能伝承活動の指定を受けて、玉里小学校児童を中心にした継承活動に取り組んでいる。

### 江刺甚句踊り

# 郷土芸能

(現在活動している6つの郷土芸能)

### 玉ノ木神楽



歴史公園えさし藤原の郷で

明治初期から中期にかけて悪病・悪疫などがあつたことから、菊池幸四郎、菊池利喜蔵らの有志によって遠野から修験者を招き獅子頭を造り、各戸を門打ちして廻った。その後、平穩に戻ったので、菊池利喜蔵を座元として神楽が創設され、玉ノ木神楽と称した。昭和三六年（一九六一）には和田神楽より伝授を受けて小川原流を習得。例年、八雲神社へ舞を奉納するほか、天王社、三峰神社の神事などへも奉納している。

### 行山流 角懸鹿躍



特別史跡・特別名勝毛越寺で

行山流鹿躍の由来は安永年間（一七七二〜一七八一）、東磐井郡大原村山口屋敷の又助が江戸の仙台屋敷で仙台御宮町の八幡町鹿踊を演じ、藩主から行山流の銘とともに賞与として菊九曜の紋を拝領したことによるものと伝えられている。その後、山口屋敷喜左右門に江刺郡伊手村の円蔵が門下となり、文政四年（一八二二）、伊手村の地の神屋敷を庭元として行山流鹿踊が継承された。文久三年（一八六三）、伊手村地の神より角掛村土尾の萬平、久米藏、与吉、孫太郎に伝授され、土尾屋敷で踊り始められ、明治三年（一八七〇）、伊手の地の神屋敷より巻物一巻を拝受した。以後は角懸鹿躍として土尾屋敷を庭元に、五穀豊穡や長久祈願、祖霊供養の舞楽として代々踊り継がれている。

### 小川原流 和田神楽



玉里地区センターでの創立80周年記念式典で

和田神楽は昭和七年（一九三二）、佐藤卯三郎らの先立ちで、田原村小田代の川内神楽を教授に招き、式舞六番と日光権現の仕組神楽の伝授を受けたのち、座元となった卯三郎の屋号「和田」を冠して和田神楽と号した。同二七年（一九五二）には創立二十周年を記念して、神楽記念碑を建立。その際、神楽の始祖は胆沢郡瀬台野神楽であり、小川原兄弟神楽師が有名だったことから小川原流を冠称し、小川流和田神楽の銘を碑に刻んだ。同四八年（一九七三）江刺市指定無形民俗文化財（無形十四号）に、平成一八年（二〇〇六）奥州市指定無形民俗文化財（無形二十二号）に認定され、同二四年九月に創立八十周年記念式典を実施した。